

# 博士論文要旨

## 論文題名：横光利一の欧州体験と 帰国後の日本表象に関する総合的研究

立命館大学大学院文学研究科  
人文学専攻博士課程後期課程

ナカイ ユウキ

中井 祐希

本論文は、横光利一の一九三六年の欧州体験と帰国後の作品に描かれた日本表象に注目し、横光がどのようにして日本回帰と呼ばれる思想的境地に辿り着いたのかという問題を論究している。

従来の研究史では、横光の欧州体験を基にした長篇小説「旅愁」とそこでの改稿作業、同時並行で書かれた〈梶もの〉と呼ばれる短篇小説群の分析を通して、横光の日本回帰の変遷を分析したものが多い。本論文では、そうした先行論の成果を踏まえつつも、次の二つの観点から、より精緻な分析を試みている。

### ①フランスだけに留まらない横光の欧州各国での体験への注目（空間的視座）

先行論の傾向として、「旅愁」前半部がパリを主な舞台としているせいか、横光の欧州体験はパリ体験と同義であると見なされてきた。しかし横光が滞在していた一九三六年は、フランスの人民戦線運動の隆盛のほか、ドイツのベルリン・オリンピック、ソビエト連邦の影響力の大きさなど、政治的・文化的にも多種多様な国々が覇を競い合っていた。フランスだけを焦点化するのではない、様々な国での体験として捉え直すことで、横光の欧州体験をさらに緻密に検討することが可能となる。

### ②戦前・戦中・戦後という各時代の特異性と連続面への着目（時間的視座）

「旅愁」は一九三七年から一九四六年まで、十年近くにわたって書き続けられた作品である。言い換えれば、戦前・戦中・戦後という社会や政治体制、人々の価値観が激動する時代の中で書かれたのである。「旅愁」は戦後、日本賛美・戦争肯定の書として断罪されることになるのだが、本論文では戦後の地点から「旅愁」の問題性を糾弾するのではなく、戦前なら戦前、戦中なら戦中といった同時代状況を重視していく。時代毎のコンテクストと重ね合わせることで、「旅愁」で提出されたテーマがどのように変化し、また問題を孕んでいったのかについてより詳細に考察することができる。

本論文は全六章から構成されている。第一章では、パリに着くまでの欧州航路での体験を取り上げた。航海中に開催された計五回の洋上句会での俳句と、高浜虚子の熱帯季題論を参照することで、横光が徐々に言語とトポスの関係について関心を深めるようになった

経緯を明らかにした。第二章では、滞在中に書かれた海外紀行文「欧州紀行」を取り上げ、帰国後執筆された小説「旅愁」とは異なるパリが描かれていることを指摘した。第三章では、フランスやドイツといった列強国とは異なる国ハンガリーでの体験を取り上げた。ブダペスト体験を描いた小説「罌粟の中」の分析と、ハンガリー国内におけるツラニズムの思潮を踏まえることで、横光のブダペスト体験が徐々に個人的な体験から日本人としての体験へと書き変わっていく過程を詳述した。また「罌粟の中」で、音や言葉がキーワードとなっていることを押さえ、「旅愁」との関係性について論じた。第四章では、ベルリン・オリンピックでの体験を考察した。オリンピックでの日本選手達の不振の理由を天気せいだと横光が解釈している点に注目し、日本人の身体は環境やトposによって影響を受ける、いわば植物的な存在であると横光がみなしていたことを指摘した。そして、このような植物的な身体観が、帰国後書かれた「旅愁」にも受け継がれていることを明らかにした。第五章では、矢代の〈異言語〉体験に注目し、「旅愁」第一・二篇と第三篇以降の連続性について考察を行った。パリでの矢代の〈異言語〉体験と、自分たちの世代はすでに西洋化されているといった意識から、矢代が帰国後古神道に関心を向けていく理路を明らかにした。第六章では、戦後発表された小説「微笑」を取り上げた。戦後の激烈な批判に対し、横光は「微笑」を通して、冷笑的な戦後空間に異議を唱えようとしていたことを考察した。

以上、全六章の分析を通してわかったことは、横光があくまでも具体的な素材（例えば俳句や言語や身体）から日本回帰の問題に迫ろうとしていた点、そして二項対立を意識しつつも、そこから零れ落ち、また対立を無化させていくような要素（例えば、パリの外国人やハンガリーというトpos、「微笑」で登場する栖方）に注目した点である。日本回帰へ至る横光利一の思想的行程には、自分自身を取り巻いて離さない身体や言語、そして欧州での体験が大きく影響を与えているのである。